

池での事

深夜の書斎の中で僕は夕方の池での事を検証してゐる
池の面にはうす墨色の枯木の枝がうつつてゐた
いくひらかの梅の花びらがひつかかるやうにして浮いてゐた
「あら 鯉がゐるのね」
鮮やかな朱と白の一匹が浮んでゐてゆつくりと動きはじめた
「何十年も前の話になるけど
僕が角帽をかぶつてゐたころ ここに来たことがあるんだよ
池にうつつてゐる帽子がゆれてゐた
角帽の角の先端がゆれてゐたのではなくて丁度そこに亀がゐたんだ
首をのばして向ふへ行つた」
僕は池の中に手を入れた
「あぶないわよ」
「今日の記念に君にあげるために石をひろつたのさ」
「うれしい」
「今晚 これに字を刻むであげる」
「何と言ふ字でせう」
鯉は池の中央で花びらを呑んでゐた
「夢」
それを聞いて急に立ち上つたお前
つられて僕も立ち上つた
華やかな狂乱の姿勢
バランスを保つために抱きあつて 二人だけの関係になつた
自分たちと風景の傾斜
ああ お前
あの時亀が水面に現はれたとしたら
頭にひとひらの花びらをのせたまま
僕たちの方を見てニヤリとしたのではないだらうか